会長講演

中津藩蘭学とパイオニア精神
――明治前後の中津医学史を中心にして――

川嶌眞人
医療法人　玄真堂
川嶌整形外科病院

前野良沢から福沢諭吉に至るまで、中津藩は多くの蘭学者を輩出し、日本の蘭学の発展と近代化のために大きな貢献をした藩である。中津藩の蘭学の発展は、奥平昌鹿や奥平昌高といった、歴代の藩主が蘭学に理解を示し、自らがリーダーシップを取って家臣に蘭学を学ばせ、人材を育成したことに特色がある。

中津城三代目の藩主奥平昌鹿（一七四四～一七八〇）は母の骨折を長崎の蘭方医吉雄耕牛が見事に治療したことから蘭学に興味を抱き、藩医前野良沢（一七二三～一八〇三）を長崎に派遣した（一七七〇年）。良沢は藩主の期待に応え、ターヘル・アナトミアを杉田玄白らと翻訳して、蘭学の開祖となったことはあまりにも有名である。

中津市立村上医家史料館には「長寿」と書かれた良沢の書が残されている。「虚心、石を友とす」といいながら、名利も浮世の交際も捨ててひたすら学問に没頭した天才蘭学者であった。

五代目藩主奥平昌高（一七八一～一八五五）は薩摩藩主・島津重豪の次男として天明元年（一七八一）、江戸に生まれた。中津藩主昌男の死去に伴い、中津藩主奥平家の養子となり、昌男の娘八千姫と婚儀を挙げ、寛政九年（一七九七）名実ともに中津藩主となった。シーボルトとも親交し、江戸屋敷はオランダ屋敷といわれるほどの建物まであり、熱烈なオランダ通となった。自らもオランダ語を学び、日本で最初の和蘭辞書「蘭語訳撰」（一八一〇年）、三番目の蘭和辞書「中津バスタード辞書」（一八二二年）を出版した。これらの辞書に関与した蘭学者は前者は神谷弘孝、後者は大江春塘（一七八七～一八四四）である。ともに長崎に留学してその影響を受けた。昌高は同じく長崎に留学させていた村上玄水の九州での最初の人体解剖を許可した（一八一九年）。玄水は解剖の記録を「解臓記」として残し、その家は三〇〇〇点の医学史料を蔵する村上医家史料館として保存公開されている。

幕末になると中津の蘭学は次第に民間の医師が中心になり、奥平藩がそれをバックアップする形へとなってゆくのが特色である。

嘉永二年（一八四九）、辛島正庵（一七七九～一八五七）を初めとする中津の医師十名は、長崎に赴き、種痘のためのバタビア由来の痘苗を入手し、中津に持ち帰って種痘に成功した。辛島家には、四〇〇点を越す医学史料が発見された。中津医学校の基礎となった中津医学館は、種痘の成功に市民が感動してボランティア基金が集り、文久元年（一八六一）、勢溜に設立され、種痘館としても大いに活用された。医学館は、明治になってから西洋医学教育の必要性から医学校へと発展的に解消された。

明治四年（一八七一）、中津医学校校長に就任した大江雲澤（一八二二～一八九九）は「医は仁ならざるの術、務めて仁をなさんと欲す」という、今日医のリスクマネジメントを意味する医訓を残し、外科医としてのみならず教育者として優れた業績を残した医師として知られている。大江雲澤の家を調査したところ、華岡青洲の画像や多数の華岡流外科手術図が発見され、当時の中津藩から華岡塾の大坂分塾に五名の医師が派遣され、学んでいたことが判明し

た。そのほかに「解体新書」や「重訂解体新書」なども発見されており、前野良沢を生んだ流れが幕末でも続いていたと考えられる。雲澤は「癰瘡経験方　叙」という医訓の中で、文献や経験のみに頼り過ぎる医療の恐さを指摘し、自分の犯した医療事故についても記載している。自らの頭でよく考え、先人の教えを謙虚に学ぶことの重要性を述べている。

中津医学校の病院長を務めた藤野玄洋（一八四〇～一八八七）は、緒方洪庵の適塾で蘭学を学び、長崎の医学校でボードインより外科学、眼科学を学び、大分医学校の設立建白書を大分県に提出し、その実現に苦心した。明治十年（一八七七）、西南戦争勃発のため下関に月波楼医院を設立、戦傷者の収容に備えたが、この医院は妻ミチによって、春帆楼という料亭となって、日清戦争の講和条約の談判会場として歴史にその名前を残した。

江戸末期中津出身の外科医として、松本良順らと医学会の始まりである、「医学会社」を起こしたり、「外科手術」を著し、「医事新聞」「文園雑誌」などの医学雑誌を創刊した田代基徳（一八三九～一八九八）が知られている。基徳の実父は松川北渚といい、福岡黒田藩の儒学者、亀井昭陽の高弟であり、多能村竹田、頼山陽とも交遊した儒医である。亀井一族の漢学は中津にも影響をおよぼしていた。基徳は緒方洪庵の適塾に学んだ。適塾には福澤諭吉をはじめ中津から十一人が学んで、幕末の中津藩蘭学者に影響をおよぼした。基徳は明治元年（一八六八）「切断用法」を出版し、整形外科の礎ともなる業績を残した。洪庵が西洋医学所頭取になるとともに、江戸に移り、講師として蘭学を教えた。その後、大学東校（東京大学医学部の前身）で大助教となり、後に陸軍軍医学校校長となって日本の軍陣医学の近代化に貢献した。

基徳の養子田代義徳（一八六四～一九三八）は、明治三十三年（一九〇〇）文部省留学生として、ドイツに留学、ベルリン大学ではウォルフ教授、ハイデルベルグ大学ではブルピウス、ウィーン大学ではローレンツ、ウルツブルグ大学ではホッファ教授に学び、整形外科を専攻した。明治三十七年（一九〇四）に帰国、明治三十九年（一九〇六）五月九日本整形外科の開祖として、初代東大整形外科教授に就任し、さらには大正十五年（一九二六）、日本整形外

科学会初代会長として、整形外科の発展に大いに貢献した。義徳は整形外科の領域を外科から独立させたのみならず、運動器を広範囲に扱う専門領域として外傷からリハビリテーション、肢体不自由施設に至るまで取り扱う科として発展させた。

中津にこのようなパイオニアが出現した背景には藩をあげて官民が一体となり取り組んだ蘭学の背景がある。前野良沢たちの蘭学にかけたエネルギーは明治以降も継承され、明治一九年（一八八六）献体解剖を行った田原春塘は田原淳（一八七三～一九五二）を養子に迎え、やがてドイツに留学させて刺激伝導系の発見へと結実した。

【参考文献】

1　「蘭学の泉ここに湧く」　川嶌眞人　西日本臨床医学研究所　一九九二年
2　「医は不仁の術、務めて仁をなさんと欲す」　川嶌眞人　西日本臨床医学研究所　一九九六年
3　「蘭学の里・中津」　川嶌眞人　近代文芸社　二〇〇一年
4　「中津藩蘭学の光芒」　川嶌眞人　西日本臨床医学研究所　二〇〇一年